

全校宿泊体験活動を通して生徒の意欲と実践力を高める指導の工夫
－生徒指導の三機能を生かした取組みを通して－

Teaching Measures to Raise Students' Self-Utility
through All-School Accommodation Experience Activities:
Through Efforts that Make Use
of the Three Functions of Guiding Students.

八川 慎一
Shin-ichi HACHIKAWA

岡田 大爾
Daiji OKADA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』
“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”
ISSN:1884-9482

第9号 抜刷
Off Print of the 9th Edition

広島国際大学 心理科学部 教職教室
Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2017年 12月
December, 2017

全校宿泊体験活動を通して生徒の意欲と実践力を高める指導の工夫 —生徒指導の三機能を生かした取組みを通して—

廿日市市立 阿品台中学校 八川 慎一
広島国際大学 心理科学部 教職教室 岡田 大爾

要 旨：学習指導要領改訂のたびに体験活動の充実が上げられ、集団宿泊体験活動の重要性が述べられているが、集団宿泊活動に生徒の意欲や実践力の向上について具体的かつ客観的に検証された研究例は少ない。本研究の対象中学校は、各学年10数名の小規模校で、1年生と3年生は落ち着いており、生徒間の関係もよいが、2年生の課題は大変大きく、約3分の1の生徒は、教員によって態度が大きく異なり、厳しく指導すると暴言を吐いたり、気分が悪いと言って保健室へ逃避したりした。担任を中心に指導を重ねるが、しばらくすると再発した。また、小学生の時から喫煙が常習化する数名の生徒は、トイレや更衣室や校外等での喫煙が発覚することもしばしばあった。様々な問題行動を繰り返す生徒たちに、後追いの治療的生徒指導にあたることが続いた。さらに、前年度から関わってきた教師たちの疲弊感と課題の大きい生徒たちに関わりたくないという思いを強く感じる状況であった。そこで、教員と生徒との人間関係を築き、人間性豊かな生徒を育成するための集団宿泊体験活動を教材開発し、「全校宿泊体験活動の企画・運営活動の体験において、生徒指導の三機能を生かした取組みを行えば、生徒同士、生徒と教員との人間関係を築き、生徒の意欲と実践力を高めることができるであろう。」という仮説を2年間の全校集団宿泊体験活動において検証した。1年目における2学年生徒の振り返りを活用し、2年目の3学年時に生徒指導の三機能を生かす工夫を考えた。その結果、生徒の感想や振り返りの状況から生徒指導の三機能を生かし、前年度の生徒から出た振り返りを生かす活動は、生徒同士、生徒と教員との人間関係を築き、生徒の意欲と実践力を高めるのに有効であることが分かった。一方、課題として、他の行事と関連させ、さらに効果的な活動に仕組むことが必要であることが分かった。

1. 研究の考え方

1.1 全校宿泊体験活動を進めるに当たって

中学校学習指導要領解説特別活動編¹⁾(平成20年3月文部科学省)に、「校外における集団活動を通して、教師と生徒及び生徒相互の人的な触れ合いや信頼関係の大切さを経験し、生涯の楽しい思い出を作ることができる。さらに、自律的な集団行動を通して、健康や安全、集団生活のきまりや社会生活上のルール、公衆道徳などについて望ましい体験を得ることにより、人間としての生き方についての自覚を深める。」と述べられている。

また、坂本²⁾は、「体験活動は、すべて児童生徒が、自発的、そして、自主的に計画し活動すると

ころに大きな意義がある。自然体験活動というのは、豊かな自然の中へ児童生徒が連れていかれて、そこで、教師の指示で、いろいろな体験をさせられたり、極端な場合には、その体験を強いられるというような形で行われるものではない。児童生徒の自発性、自主性が十分に発揮されうる状況のもとで、その活動内容が、自然と「かかわる」もの——これが、自然体験活動である。」と述べている。

これらのことから、校外における集団活動において、生徒の自発的、自主的に計画し活動するものにしていく必要があることが分かる。生徒の自発的に計画しようとする意欲と実践力を育てることができると言える。

次に、坂本³⁾は、「仲間と一緒に食事をしたり宿泊したりすることは、自然に人間を赤裸々な姿にさせる。“ねたり”“食べたり”することは人間の自然の姿であるから、必然的に人と人とを結びつける働きをする。(中略)“本音”と“人間性(人間的弱さ)”が出されて、相互に理解しあえるのは、集団宿泊という“一緒に寝て、一緒に食べる”生活だからである。子供同士の親近感を育てるためにも、子供と教師・指導者の間の人間関係をあたたかいもの、身近なものにするためにも、集団宿泊生活は、有効である。」と述べている。

さらに坂本⁴⁾は、集団宿泊体験活動における自然教室のねらい3点について「ア 規律ある集団生活を通じ、人間的な触れ合いを深め、信頼関係を確立する。イ 自然との触れ合いや地域社会への理解を通じ、通常の学校生活では得がたい体験を与える。ウ 自然の中で、野外活動を通じ、健康の増進を図る。」と述べている。この中のアについて、「教師と子供たちとの人間的な触れ合いを深める。子供同士の友情を深める。基本的な生活習慣を身につけさせる。自律的に生活する態度を身につけ、自立心を育てる。」ことを述べている。

これらのことから、集団宿泊体験活動は、教師と生徒、生徒同士の人間的な触れ合いや信頼関係を確立することに有効であり、よりよい生徒理解・生徒指導につなげていくことができるといえる。さらに、人間的な心を育て、自立心を育てることに有効であることが分かる。

1.2 生徒指導の三機能について

生徒指導提要⁵⁾には、「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意することが求められています。」と述べられている。これらの3点は、生徒指導の3機能のことであり、広島県教育資料⁶⁾では、具体的に次のように示されている。

自己存在感を与えるとは、生徒一人一人は、かけがえのない存在であり、一人一人の存在を大切にしている指導のことである。また、自己存在感は、他者との関わりの中で見いだされることから、望ましい集団づくりが重要である。

共感的人間関係を育成するとは、教員と生徒及び生徒同士が、相互に尊重し共感的に理解し合う人間関係を育成することである。

自己決定の場を与えるとは、児童生徒が、決められたルールを守り、自分自身で責任が取れる範囲内で、自らが鼓動を選択し、その行動に責任を取る機会を与えることである(太字は引用者)。

対象中学校において、これらの生徒指導の三機能を活用することが十分機能していない状況ととらえ、このことを踏まえて組織的に取り組むことを考えた。

1.3 児童・生徒理解の進め方

須藤(2008)⁷⁾は、児童生徒理解に関して、「教師から見て理解が困難な子どもの行為であっても、その子どもなりの認識(欲求)に基づく行為として、そこには行為への必然性が潜んでいるのである。このことを理解して児童・生徒と接することにより、児童生徒は、自分が受け入れられていることを実感し、教師との強い信頼関係に支えられ、さらに自己を洞察し自己理解を深め、自己指導能力が一層促進されることになるのである。」と述べている。このことから、問題行動や課題のある生徒の状況においてもその潜んでいる必然性や背景を理解して粘り強く関わることを通して、教師との信頼関係を築いていくことが重要であることが分かる。

また、有馬(2002)⁸⁾は、児童・生徒理解を左右する教師の見方において、対人認知を歪めやすい要因、教師特有の児童・生徒認知の仕方、それぞれの教師独自の見方を述べた後、児童・生徒理解の進め方について次のように述べている。「教師は、教師集団や児童・生徒集団から、とくに肯定的あるいは否定的に認知されやすい児童・生徒に対して、自らの認知的態度をコントロールし、できるかぎりニュートラルな立場から認知を行うように努める。」また、「教師は、児童・生徒認知において、児童・生徒情報に関する一元的な視点に重みづけする見方から、より多元的な情報を収集し、重みづけを変化させることで、児童・生徒認知を固定化しないようにする。」さらに、「即断的・短絡的に結論づけることを避け、何度も、多角的に確認しながら認知を行う。」

さらに和田(2008)⁹⁾は、「中学校における生徒指導の内容は、発達上の課題とかかわることや、校外での行動範囲の拡大などにより、多岐にわたっている。したがって、これらの指導に当たっては、各教師の中学生の発達に関する理解や個々の生徒理解を深めるとともに、校内の教員間の連携や組織的な全校体制による指導が不可欠である。」と述べている。

以上のことから、教師は、組織的に生徒指導を行うにあたり、それまでの状況から生徒を肯定的・否定的両面で認知するのではなく、常にニュートラルに戻して認知するようにし、多元的に情報を収集し、生徒の認知を固定化せず、実践においても多角的に確認しながら実践につなげることが必要であることが分かる。そして、校内の教員間の連携を密にし、生徒理解について教員間で共通理解した全校体制による指導を充実させなければならないことが分かる。

2. 対象中学校の状況と仮説

2.1 対象中学校の学校・生徒の概要

対象中学校の地域は、まわりを海や山に囲まれ、豊かな自然という教育資源に恵まれている。また、地域の老人会とのつながりを生かしたしめ縄づくりや農園活動等の取組みを継続しており、地域とのつながりを大切にしている学校である。

対象中学校は、各学年10数名の小規模校で、生徒は保育園から中学校卒業までの約12年間、クラス替えがなく共に過ごしている。生徒は全体的におとなしく、一人一人はまじめで優しい。しかし、小集団の中で慣れ合いの傾向になるときは、仲間同士で伸びていこうとする面に課題が見られる場合もある。また、固定的な人間関係になりがちで、人数に限りがあるため、いろいろな人と関わり合うことを仕組むことが難しい。幼いころから少人数で過ごしてきているため、それぞれの長所や短所もよく知っており、力関係は固定化の傾向にある。慣れていることから表面上の和を保つ傾向もみられる。これらのことから、小学生時からよりよい関係の集団であればよい人間関係が継続するが、仲間関係が崩れていけばクラス替え等がないため、修復することはかなり困難であった。

2.2 対象中学校の生徒及び、教員の状況

①生徒の状況

取組みの当初の状況は、1学年と3学年は落ち着いた学年で、生徒間の関係もよかった。しかし、2学年の課題はたいへん大きかった。2学年10数名中の約半数が怠学傾向にあり、約3分の1の生徒は、先生によって態度が大きく異なり、教師への暴言もあった。教師との人間関係をなかなか築くことができなかった。授業に集中できず、ノートへの落書きや私語を続けて授業を妨害し、厳しく指導すると暴言を吐いたり、気分が悪いと理由を言って保健室へ逃避したりした。保健室に入り浸る生徒の約8割は、遅刻や早退、欠席が多くなった。また、小学生の時から喫煙が常習化する2学年の10数名中の約3分の1の生徒は、トイレや更衣室等で喫煙が発覚することもしばしばあった。さらに長期休暇に入ると髪を染める生徒も複数いる状況であった。

<その他、2学年の生徒の状況>

- ・前年度は、真面目な生徒の靴の中に押しピンを入れ、嫌がらせをするいじめが継続してあった。
- ・前年度に関係がよくなかった卒業生から男子生徒が暴力等の被害を受け、その捌け口として問題行動につながる悪循環も見られていた。
- ・問題行動を繰り返す生徒たちと教員との人間関係が築けていない状況であった。

◎以上のような状況から、対象学年である2学年の約半数近い生徒たちは、先生たちから注意を受けることが多く、学校においてはマイナス的な存在感を持っていた。教師との人間関係もうまく築けていない状況であった。また、各活動において学級内はもとより、異学年間においても協働的に取り組むことに課題が大きく、生徒同士で共感的な関係を築くことが難しい状況であった。

②対象学年に対する教員の意識

本研究の初年度は、教員の本務者の約4割が転勤で入れ替わっており、生徒との人間関係をこれから築いていく状況であった。これまで問題行動の指導を行ってきたが何回指導しても改善が見られず、問題行動の喫煙や染髪、いじめなどが繰り返されていた。何とかしたいという思いはあっても疲弊感・徒労感が続き、問題行動を繰り返す生徒たちと関わりたくないという思いをもっている教員も複数いる状況であった。また、問題行動を繰り返す生徒たちを「この生徒たちが信じられない。」「この生徒たちは、どうかしている。」など、このような生徒たちと関わりたくない思いをもった教師の言葉として日々聞かれる状況であった。

2.3 仮説

本研究では仮説を「全校宿泊体験活動の企画・運営活動の体験において、生徒指導の三機能を生かした取組みを行えば、生徒同士、生徒と教員との人間関係を築き、生徒の学校生活における意欲と実践力を高めることができるであろう。」として実践した。

3. 生徒理解と全校宿泊体験活動等の取組みの視点

3.1 生徒理解を図り、生徒の思いや考えを生かす全校宿泊体験活動の取組みの視点

生徒理解を図るポイントとして、全教員が過去の問題行動の状況にとらわれず、先入観を持たずに一人一人の生徒に関わり、自己存在感をもたせ、共感的な人間関係を育成した活動を仕組み、その活動において自己決定の場を与えるなど、生徒指導の三機能を生かした取組みを実践する。

また、問題行動や課題のある生徒に粘り強く関わり組織的に指導することを通して、その行為への必然性や背景を把握し、生徒理解を図ることも重要である。そして、全校宿泊体験活動において、生徒指導の三機能を生かした取組みを実践し、生徒たちの思いや考えを把握して、ねらいと関連させて学校生活に生かすように計画する。

3.2 異学年も含めた生徒同士の関係づくりを深める全校宿泊体験活動の取組みの視点

異学年集団としての縦割り班を活用した活動の中で、人間関係づくりを仕組む。全学年による縦割り班は、年度初めから毎日の掃除の時間や地域の老人会との農業体験活動(総合的な学習の時間)などで活動を仕組んでいる。全校宿泊体験活動における異学年の縦割り班でも、一人一人に役割をもたせ、自己存在感や共感的な人間関係を築いていけるように協働的な関わり合いをもたせる。

3.3 その他の学校行事や授業等の取組みの視点

6月に実施する全校宿泊体験活動をきっかけとしながらも、ふれあい音楽祭(6月実施)、保小中合同運動会(9月実施)、文化祭(10月実施)、地域の老人会との農業体験活動の収穫祭(1月実施)などの学校行事や日常の授業においても同様に、生徒指導の三機能を生かす実践を全教員で共通認識して協働的に取り組む。

4. 全校宿泊体験活動の実践と分析

4.1 1年目の全校宿泊体験活動

例年6月の中旬に1泊2日の全校宿泊体験活動を行ってきた。小規模校の特性を生かし、全校で縦割りの班を編成し、活動を仕組んだ。

①全校宿泊体験活動（1泊2日）のねらい

- ア 集団生活を通して、主体的・意欲的な態度を養う。
- イ 異学年の活動を生かし、共同生活の意義を実感させ、学年を越えた仲間づくりを図る。
- ウ 協働して活動をやり抜くことを通して、相互連帯の意識を深め、協働的な態度を養う。

②全校宿泊体験活動の主な日程と内容

	時間帯	内容
1 日 目	入所	入所式
	午前	ディスクゴルフ
	昼食	食堂での食事
	午後	七宝焼きづくり
	夕食	食堂での食事
	夜	レクリエーション、ふれあい音楽祭（2週間後に実施）の練習
	就寝	
2 日 目	朝	起床、朝の集い、清掃活動
	朝食	食堂での食事
	午前	カッター研修
	昼食	食堂での食事
	午後	オリエンテーリング
		2日間の全校宿泊体験活動の振り返り、反省
夕方	退所式	

③全校宿泊体験活動を終えての生徒の振り返り、感想など

- ア 印象に残ったプログラム（ベスト3）
 - 1位：カッター研修
 - 2位：ディスクゴルフ
 - 3位：オリエンテーリング
- イ 生徒の振り返り、感想

＜課題の見られた男子生徒A、Bの振り返り＞

- A 1泊2日はあっという間に終わってしまった。もう1泊してたくさんの活動を行いたかった。来年は、自分たちで火を起こして食事を作る野外炊飯を絶対やりたい。また、キャンプファイヤーをやって、テントにも宿泊したい。
- B カッター研修が一番印象に残った。指導員はとても厳しかった。オールをこぐことがむずかかった。こぎ続けるとだんだん肩が痛くなって腕も痛くなり指の皮もむけた。途中の休憩の時、厳しかった指導員がとても優しく話をしてくれた。海の上では乗っている僕たちの命を守るために厳しく指導していることが分かった。終わってみてとてもよい体験をしたと思った。

＜その他の同級生の振り返り＞

- P 一番印象に残ったことは、カッター研修です。最初はカッターを漕ぐことは、とても楽だと思っていました。でも実際経験してみると思っていた以上にたいへんつらかったです。途中まで一人で漕いでいたけど、途中から二人で漕ぐことになった時、とても楽になりました。指導員の言葉で印象に残ったのは、「カッターは、一人だけの力では前になかなか進まない。全員の力と息があってこそすべるように進むことができる。」です。カッターでは、協力する大切さを学びました。
- Q カッター研修は、楽にできるだろうと甘い考えでいました。実際にカッターを見たときとても驚きました。オールがとても大きく重かったからです。それに指導員の先生がとても厳しかったのです。たった一人でも気を抜くとやり直しで厳しく指導されます。最初からきびしいと聞いていたけど、実際もとてもきびしかったです。

④今回の全校宿泊体験活動の振り返りから来年度に向けて

- ・カッター研修が生徒にとって印象に残っていることが分かる。この理由として、厳しい内容であったがやり切った達成感や協働して取り組む大切さを学んでいた。このことから、次年度もこのように厳しくても達成感のある活動を仕組むことを検討する。
- ・期間について、1泊2日より長い期間を希望している生徒が約半数以上見られたことから、次年度は2泊3日の実施を検討する。
- ・活動内容について、問題行動等の課題のある生徒の意見の中に、自ら野外炊飯やキャンプファイヤー、テントへの宿泊を希望している状況から、この思いを汲み取り、全体の活動内容に反映させることから、存在感や自己決定の場を与える取組みにつなげるように検討する。

4.2 その後の2学年の状況

①1学期後半

1学期の前半と同様に、2学年の半数の生徒は授業に集中できず気分が悪いと理由を言って保健室へ逃避し、その中でも数名は厳しく指導すると暴言を吐く状況は続いた。その後、部活動や掃除の時間、日常の活動において、学年はもとより異学年も含めた校内で自己存在感をもたせるような取組みや共感的な人間関係を育成するための活動を仕組み、関わりを持ち続けた。

②夏休み

夏休みになると、先ほどの男子生徒2名（A、B）は毎日ある部活動を欠席した。家庭訪問すると男子生徒Aは髪を金髪にしている状況であった。また、男子生徒A、Bともに隠れて喫煙している状況も把握した。保護者とも連携し、生徒Aの髪を黒く染め直させて部活動に参加させたが、男

子生徒Aは、数日後、無断欠席して髪を再び金髪に染めるなどの状況を繰り返した。これは、髪を染め直させる対症療法の指導だけでは効果がないと考え、家庭訪問を繰り返し続けて生徒との対話を継続し、生徒理解を深める取組みを行った。その関わりを持ち続ける中、男子生徒Aの深い思いを聴くことができた。それは、その生徒が中学1年生までにおけるつらい体験であった。例を挙げると、高校を中退していた同じ学校の先輩である卒業生からの暴力を受けた話やその卒業生とのつながりで小学5年生時から喫煙を始めた話などであった。中学2年生になってからはその卒業生との関わりはなくなっていたが、その卒業生から受けた心の傷は癒えていない状況であった。この男子生徒Aの思いを聴く中で「絶対に君を守る」ということと、「これから新しい君自身を築いていこう」という話をしていた。このことは、管理職、生徒指導主事に報告して教員全員で共有し、生徒理解を教員全体で深めていくように日々の授業や行事等で取り組むことを確認し、生徒指導体制の確立を図った。このような取組みの中、少しずつ教員と生徒との距離が縮まっていった。

③ 2学期

2学期は、生徒の自己存在感、共感的人間関係の育成に生かすことのできる小中合同運動会と文化祭をチャンスと考えた。

小中合同運動会において、中学生がリーダーとなって進める応援合戦をポイントと考えた。クラスの生徒全員に中学2年時の役割を意識させて応援リーダーへの立候補を働きかけた（自己決定の場を与える）。大きな声を出すことのできる男子生徒A、Bは、応援リーダーに立候補して応援練習に参加し、3年生にも頼りにされる存在となっていた。小中合同運動会では、男子生徒A、Bを含めた中学生の応援リーダーは存在感を示し、まわりから認められる瞬間であった。

文化祭では、一人1役以上の役割を持たせ、学級劇では先ほどの男子生徒A、Bをリーダーとして取り組んだ。劇のシナリオにおいては、同じような課題を抱えていた女子生徒Eのアイデアを生かし、自己存在感をもたせ、共感的な人間関係を育成できるように自分たちで協力して作り上げるように仕組んだ。しかし、男子生徒Aが直前で病気による入院や、課題の大きい女子生徒の家出など、生徒指導上の諸問題が繰り返されたり、生徒がそろわない状況が続いたり、一筋縄ではいかない難しさを感じた。結果的に不十分な取組みになってしまった。

④ 3学期

3学期の主な行事は、対象中学校区内にある地域とのつながりを大切にしている老人会との農園活動を通した「収穫祭」であった。夏から秋にかけて育てた冬野菜をもとに老人会の方々、保護者と一緒に料理を作り、収穫した野菜を共に味わうものであった。2学年の課題の多い紀伊生徒たちは、ややもすると地域からも浮いている状況であったが、ここでも自己存在感をもたせ共感的な人間関係を育成するチャンスととらえ、男子生徒A、Bをリーダーとして生徒たちで料理の内容を決定させていく（自己決定の場を与える）ことにより、地域や保護者の方々にも2学年の生徒たちのよい面を見せることができた。この取組みは翌日の新聞記事にもなり、生徒たちの達成感を持たせることにつながった。

このように取り組む中、授業において改善が見られるようになり、生徒との距離はどんどんなくなっていった。

4.3 2年目の全校宿泊体験活動

昨年度の全校宿泊体験活動後の生徒指導の三機能を生かした取組みを継続し、生徒理解を深めていく中、1年目の振り返りを受けて次のような2泊3日の全校宿泊体験活動を実施した。

①全校宿泊体験活動（2泊3日）のねらい

- ア 生徒自ら計画を立て、主体的・意欲的な態度を養う。
- イ 異学年の活動を生かし、共同生活の意義を実感させ、学年を越えた仲間づくりを図る。
- ウ 協働して活動をやり抜くことを通して、相互連帯の意識を深め、協働的な態度を養う。

②生徒へのはたらきかけ

3年生となった生徒たちへ4月の学級開きのとき、6月に実施する全校宿泊体験活動について働きかけを行った。昨年度の振り返りの中における生徒から出ていた次年度への要望「2泊3日にしてほしい」、「野外炊飯をやりたい。」、「キャンプファイヤーをやりたい」、「テントに宿泊したい」と、学びのあった内容「カッター研修は厳しかったけど、やりきった達成感を味わうことができた。」を確認した。これらのことを踏まえ、3年生となった生徒たちが学校のリーダーとして主体的な全校宿泊体験活動にしていくように働きかけ、計画づくりに主体的に参画するように仕組んだ。（自己決定の場）

男子生徒A、Bも含め、昨年度の自分たちの要望や思いを先生たちが覚えていて今年につなげてくれていることにより印象をもち、意欲的になっていることが生徒同士の会話から伺えた。

その後検討する中、次のような日程と内容を作成した。

③全校宿泊体験活動の主な日程と内容

	時間帯	内 容	
1日目	入所	入所式	
	昼食	弁当	
	午後	登山	
	夕食	食堂での食事	
	夜		ふれあい音楽祭（2週間後に実施）に向けての練習
			班長会で1日の振り返り
就寝	宿泊棟に宿泊		
2日目	朝	起床、朝の集い、清掃活動	
	朝食	食堂での食事	
	午前	クラフト（竹箸、竹コップづくり）	
	昼食	食堂での食事	
	午後	オリエンテーリング	

		野外炊飯の準備
		野外炊飯, 片付け
	夜	キャンプファイヤー, きもだめし
		班長会で1日の振り返り
就寝	テントに宿泊	
3日目	朝	起床, 朝の集い, 清掃活動
	午前	炊事等, 炊事道具等の片づけ
		全校宿泊体験活動の振り返り
	昼食	食堂での食事
退所	退所式	

③全校宿泊体験活動を終えての生徒の振り返り, 感想など

ア 印象に残ったプログラム (ベスト3)

1位: 登山

2位: 野外炊飯

3位: キャンプファイヤー

イ 生徒たちの振り返り, 感想

<これまで課題の見られた生徒の振り返り>

- A 去年僕たちがやりたいとっていた野外炊飯が自分たちの力でできたことがうれしかった。野外炊飯は、みんなが一つになってできたと思う。だから一番印象に残った。全校宿泊体験活動の期間は、1泊2日より、2泊3日の方が「やり切った」という気になり、達成感があったと感じた。来年は卒業しているため、もう全校宿泊体験活動に行けないから、今回の経験を忘れたくない。来年も野外炊飯は絶対やるべきだと思う。
- B やっぱりあの自分たちで作った飯がとてもうまかった。ぼくは薪割りとかしたけど、これがめっちゃおもしろかった。薪が何回で割れるかとかを考えて、何回か木がすっぽ抜けたとき、少し怖かったけど、怪我なくうまくできるようになった。かまどに火をつけることについて、木の組み方を忘れていたけど、工夫してなんとか火をつけることができた。ご飯は少し固く炊けたけど、うまくできたと思う。このような経験はあまりできることじゃないから、とてもよい経験になったと思う。これからの生活にプラスにしていきたい。
- C 今回ぼくたちは、初めてしたことが多く、よく分からないことがあったり、不便なことも多かったりしたけど、「自分たちの力で協力して解決する」ということが、いかにたいへんだったか分かった。でも、自分たちで協力して解決できたときの達成感をとても感じた。特に野外炊飯は、ガスではなく、薪から火を起こしてご飯を炊いたり、料理を作ったりします。普段では味わえないものでした。決して上手とまではいえないけど、みんなで協力して作ったものは特別おいしかったです。
- D 野外炊飯は、カレーなのかスープなのかよく分からないものができたけど、みんなで作って食べたカレーはとてもおいしいなあって思った。まわりを見ると、いろんな友達が「えっ!!」っていう感じの料理ができていて、びっくりした。いろんな発見があった。次回があるのなら、自由探検がしたい。
- E 今回の全校宿泊体験活動で一番印象に残ったのは、山登りだった。死ぬほど疲れた。でも登りきったとき、とても気持ちよかった。

<その他, 同級生の振り返り>

P 今回は、初めてしたことが多く、よく分からなかったことや不便なことも多かったです。「自分の力でやりきる！」というのが如何に大変か分かったと思います。特に野外炊飯は、ガスではなく、薪から火を起こしてつくりました。火の加減などがむずかしく、普段では味わえないものがありました。決して上手とまでは言えませんが、みんなで作ったものは特別おいしかったです。

キャンプファイヤーは、先生たちがおもしろくしようとしてくれて、楽しむことができました。テントで寝たのは不便だったけど、それはそれで楽しかったです。夜、友だちと行った思い出づくりの「きもだめし」は、自分たちで楽しもうとし、考える力がつきました。最後の全校宿泊体験活動を楽しむことができました。1泊2日より、2泊3日の方が「やり切った、達成感がある。」という気になれました。

Q 一番印象に残ったのは、登山です。登山は初めてで簡単に登れると思っていたけど、実際はとてみたいへんで、ロープを使って登るところや足場が悪いところなどがあり、とても危険だと思いました。たいへんだっただけに、それを乗り越えて頂上についたときはとてもうれしかったです。

R 2泊3日の全校宿泊体験活動は、今までで行った中で一番印象に残った。テントは広かったけど、とても寒かった。野外炊飯は、あまりうまくできたとは思えなかったけど、みんなで作った料理はおいしかった。登山は体力に自信がなく坂道がづらいから、はじめはやりたくないと思っていた。しかしやり終えてみると、登山が一番印象に残った。特に登りがすごくたいへんだったけど、頂上から見る景色がすごくきれいだったから登ってよかったと思った。

次回この全校宿泊体験活動を行うとしたら、さらに期間を延ばして一週間でもいいと思う。宿泊施設は、ベッドだとあまり意味がないのでテントがいいと思う。自給自足でもっと自然と触れ合うため、もっと大きな山で山登りをチャレンジするのもいいと思う。

S 最初は2泊3日なんて「たいがい」なんて思っていたけど、こうして終わってみるとたいへんではなかったです。次回があるとすれば、山登りや野外炊飯はした方がよいと思います。とてもよい経験になるから。僕が1年生のときにやった料理コンテストをしたらどうかと思う。また、今回やった野外炊飯を2回やるとよいと思う。例えば、昼ごはん、夜ご飯などやってみると野外炊飯がうまくなるようになると思うし、1回目の振り返りを2回目に生かせるから、さらに達成感が得られると思う。

<下級生の振り返り>

◎一番よかったのは、今まで話しづらかった先輩と話ができたことです。怖そうという印象から、おもしろい、やさしいなと思えるようになりました。

◎縦割り班で、先輩たちがリードしてくれて、とてもよい体験ができたと思います。ぼくたちが3年生になったときは、先輩たちに負けぬように頑張りたい。

4.4 生徒の振り返りの分析

- ①自分たちで計画して取り組んだ野外炊飯について、前年度に生徒から出た希望をもとに生徒が主体的に計画、役割分担して行う中で、「みんなが一つになった」、「決して上手とはいえないけど、みんなで協力して作ったものは特別おいしかった。」という内容から、自ら希望して取り組んだ内容について、特に協力して取り組んだことに達成感を感じていることが分かる。
- ②登山について、最初は簡単に考えていたり、漠然とたいへんだと感じていたりしたが、頂上にたどり着いたときのよさを実感していることが分かる。事前の意見では、登山はやりたくないという意見が見られたが、頂上という目標を持たせてやり切らせることが重要であることが分

かった。

- ③3年生時において、1，2年生の振り返りの記述の中に、「話しづらかった先輩と話ができたことが一番良かった。」と述べていることから、全学年による全校宿泊体験活動を通して、異学年の生徒との人間関係にもよい影響が表れていることが分かる。

5. 全校宿泊体験活動後の発信・取組みとその後の生徒の変容及び考察

5.1 学級通信，学校通信等からの発信

全校宿泊体験活動の成果と生徒の振り返りを学級通信，地域だよりで発信した。自己存在感をもたせることや共感的な人間関係の育成を意識して，生徒たちがこの体験活動の中で協働的に取り組んだ事実やいろいろな経験を通して生徒たちが感じた内容を一人一人について具体的に伝えた。

5.2 保護者等との連携における取組み

その後行った家庭訪問や学校行事のときの保護者との話においても通信と同じように，生徒たちが主体的に取り組んだ全校宿泊体験活動のようすを具体的に価値つけて伝えた。保護者からは，全校宿泊体験活動の話題が家庭でたくさんあったことや，よかった点をたくさん聞くことができた。

5.3 その後の学校行事や日常生活における生徒の変容

小中合同運動会や文化祭などの学校行事において，全校宿泊体験活動でリーダー性を発揮した生徒たちの中でも男子生徒A，B及び生徒会長を中心に，実行委員に主体的に立候補し，意欲的に実践することにつながった。このことを通して，下級生との人間関係もよくなり，下級生から頼りにされるようすも伺えるようになった。

以前は保健室に入り浸り，遅刻や早退の多い傾向にあった男子生徒A，Bの遅刻・早退・保健室入室が激減した。また，清掃活動や校内でのボランティア活動でもリーダーとして下級生とも協働的に活動するようになり，学校の諸活動への意欲と実践力が高まった。さらに，授業に意欲的に取り組むようになり，提出物も確実にやり切るようになっていき，教師に対する暴言や問題行動はなくなった。

6. 成果と課題

実践に当たっては，生徒一人一人の実態把握が重要であることが分かった。つまり，教師が理解できにくい行為を続け，指導の入りにくい課題の大きい生徒であっても，その行為には必然性が潜んでいることを理解して生徒と接し対話する中で，生徒から本音の思いを把握し，生徒理解を深めることが重要である。このような実態把握を教員で共有するとともに，今後の実践に生かせるもの

はないか意識しながら生徒一人一人の日常の発言や記述などを把握し、組織的な生徒指導体制を構築する。

これらのことから、全校宿泊体験活動の企画・運営活動の体験において、生徒指導の三機能を生かした取組みを行うことを通して、生徒同士、生徒と教員との人間関係を築き、学校生活における生徒の意欲と実践力を高めることができることが分かった。

つまり、毎年実施している全校宿泊体験活動のような1年越しの取組みにおいても、前年度に生徒から発信された振り返りや意見、アイデアを受け止めて、次年度の企画・運営活動に生かすように働きかけることが効果的であると言える。これは、生徒たちが自分たちの自発的な意見を生かされていることに気付き、自己存在感を感じるとともに、生徒と教師との信頼関係を築くことにつながる。そして、自己決定の場を与えて活動を進めることにより、共感的な人間関係の構築とともに、主体的に活動する意欲の向上につながる。この全校宿泊体験活動の各年度間の日常の活動や生徒の変化に応じた対応、行事等における生徒指導の三機能を生かした取組みなどが重要であり、生徒理解を深めることにつながる。このことを踏まえた全校集団宿泊体験活動における生徒指導の三機能を生かした取組みにより、生徒の問題行動や怠惰な言動や態度が減少し、生徒が主体的になり、意欲と実践力を高めることに有効であることが分かった。

また、小規模校では、いろいろな活動に応じて、異学年との交流など、通常とは異なるメンバーで関わり合う機会を意図的に仕組むことが、自己存在感をもたせ、共感的な人間関係の育成を進める上で有効であることが分かった。

さらに、登山やカッター研修のような一見厳しいように感じられる体験活動においても、目的意識を持たせ、やり切った達成感を感じさせることを通して、生徒たちの自信を持たせることができることが分かった。

課題として、他の行事と関連させて、総合的な学習の時間や学級活動の時間及び各教科とのつながりを意識したカリキュラムに位置付けて、効果的な活動に仕組むことが必要であると考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省(2010)『中学校学習指導要領解説特別活動編』, p. 80
- 2) 坂本昇一(1999)「生徒指導が機能する教科・体験・総合的学習」, pp. 220-271
- 3) 伊藤俊夫・坂本昇一(1987)『集団宿泊活動の展開-教育環境の人間化をめざして-』(株)ぎょうせい, pp. 130-132
- 4) 坂本昇一(1999)「生徒指導が機能する教科・体験・総合的学習」, pp. 268-269
- 5) 文部科学省(2010)『生徒指導提要』, p. 5
- 6) 広島県教育委員会(2017)『広島県教育資料』, p. 50
- 7) 須藤稔(2008)『生徒指導の新展開』(株)ミネルヴァ書房, p.56
- 8) 有馬道久(2002)「児童・生徒理解の進め方」高橋 超・石井眞治・熊谷信順編著『生徒指導・進路指導』(株)ミネルヴァ書房, p. 60
- 9) 和田孝(2008)「中学校における生徒指導とその工夫・改善」岩城孝次・森嶋昭伸『生徒指導の新展開』(株)ミネルヴァ書房, p. 119

参考文献

- ・岩城孝次・森嶋昭伸(2008)『生徒指導の新展開』(株)ミネルヴァ書房
- ・伊藤俊夫・坂本昇一(1987)『集団宿泊活動の展開-教育環境の人間化をめざして-』(株)ぎょうせい
- ・中西信男・坂本昇一(1981)『生徒指導・相談講座[2]自己指導を育てる生徒理解』(株)ぎょうせい